

静岡県川根地域における火の見櫓の分布とその形態

地域景観における火の見櫓に関する研究 その2

正会員
同

塩見 寛*
土屋和男**

火の見櫓 地域景観 静岡県
川根地域 類型

1. 研究の目的

本研究は前稿にひきつづき、地域景観における「火の見櫓」に関する一連の研究に位置づけられ、本稿は静岡県の中で火の見櫓の残存状況が顕著な川根地域において、その分布と形態・意匠について考察することにより、地域景観を構成する火の見櫓の存在意義、役割等を明らかにしようとするものである。

2. 調査の対象と方法

(1)調査対象 静岡県の川根・中川根・本川根の3町を川根地域と呼ぶ。川根3町は可住地面積あたりの世帯密度が前稿のリスト市町村中最も低く、過疎の市町村ベスト3に位置づけられる。また3町の火の見櫓の残存数は川根36、中川根27、本川根37、合計100あり、前稿で述べたとおり1000世帯あたりの基数も他の市町村を大きく引き離している。このようなことから、川根地域を最初の調査対象に選定した。

(2)調査方法 残存が確認されている100基の「火の見櫓」のうち87基について2000年10月～2001年3月に調査した。調査は写真撮影による記録を基本とし、併せて構造・規模(高さ、基礎台の大きさ)、半鐘、スピカ等の付帯設備及び立地環境を目視により記録した。

3. 考察

(1)火の見櫓の地域分布

川根地域は、静岡県の中央部を南北に縦断して流れる大井川の中流・上流域に位置する中山間地域である。可住地の標高は200～500mに位置する。大井川はかつて駿河と遠江の国を分けた境目であり、また町村合併前までは榛原郡と志太郡が大井川で分けられていた。地形的には大井川に注ぎ込む水系の囲われた地域空間といえるが、地域の生活は此方彼方を分ける大井川の存在により文化や習俗が分断され、小さな地域単位による生活が持続してきたと考えられる。

火の見櫓は小さな地域単位である集落に1基存在する又は存在したことが確認できた。火の見櫓は三叉路、急カーブした道路沿いや集会所の敷地内など特徴的な場所に立地することが既往研究の調査¹⁾で明らかにされているが、川根地域も同様の傾向といえる。この立地の他に集落からまったく離れた場所に設置し、隣接の集落に迅速

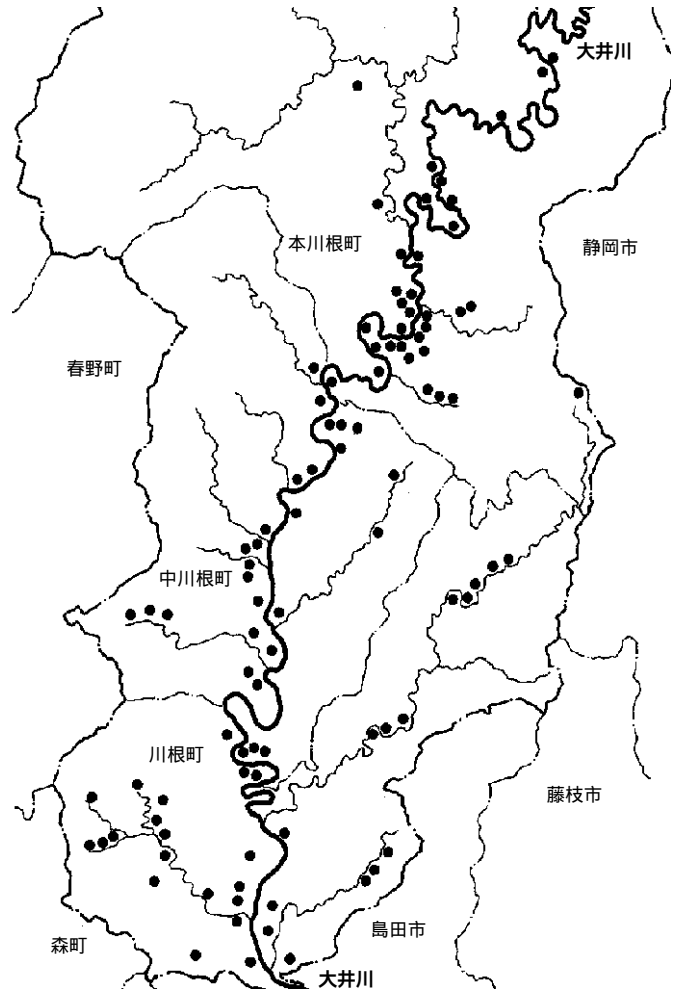


図1 川根地域の火の見櫓の分布

に伝える役割も果たしたと考えられるものが数例あることが今回の調査から特記される。火の見櫓がひとつの集落内での見る・見られる・伝える機能だけでなく、集落間の伝達手段であったことの証しといえる。

(2)火の見櫓の形態類型

火の見櫓は大きく3つに類型化される。 a)「梯子型」(26基)は梯子に支柱を付けたものである。梯子の独立柱もみられる。高さは3～5mで半鐘に切妻屋根を付けたものが多い。 b)「櫓型」(51基)は3～4本の柱によって構成され、見張台と屋根を支えるものである。高さが12～16mと高く、数も約6割を占め最も多い。 c)「櫓梯子」(10基)は前2者

The distribution of Japanese fire towers (Hinomi-Yagura) and its design in Kawane district, Shizuoka prefecture.

A Study on the design of Japanese fire towers (Hinomi-Yagura) in regional landscape, Part2.

SHIOMI Kan ,TSUCHIYA Kazuo

の折衷型といえるもので、4本の柱で構成されそのうち一面が梯子になっている。高さは4m前後と低く、頂部は方形又は切妻屋根をもつ。

(3)火の見櫓のデザイン要素

火の見櫓が地域景観のランドマ - クとなりコミュニティのシンボリック的存在となっていることは、櫓型の形態・意匠に起因していることが大きいと考えられる。櫓型のデザイン要素は、a)プロポ - ション b)見張台 c)屋根(尖頭部を含む)の3つが大きなものである。

櫓型について、見張台下端から屋根頂部(尖頭を除く)までの高さは火の見櫓の高さ(尖頭を除く)の1/5~1/6のものが多く、約7割を占めている。

火の見櫓の個性は屋根と見張台に表われている。51基の櫓型を模式的に示したのが図2である。屋根伏せの三角・四角・六角形の中でさまざまな形のヴァリエ - ションを見ることができる。尖頭の装飾及び見張台のデザインを含めて地域による差異を明らかにできる。屋根について、川根町は三角屋根、方形屋根のシンプルなものが多く、尖頭の先端に重しを付けたものが目立つ。中川根町は屋根伏せは四角形だがド - ム型のかたちが多いことが特徴的といえる。本川根町は方形又は六角屋根の隅にヒゲのような装飾があることが際立っている。反り屋根もある。尖頭の装飾もほぼ同形である。見張台について、川根町は円形が多くほとんどが手すり天端が外に広がっている。それに対して本川根町は四角が大部分を占め手すりも角張った方形である。中川根町は両町の間中間的な傾向を示している。

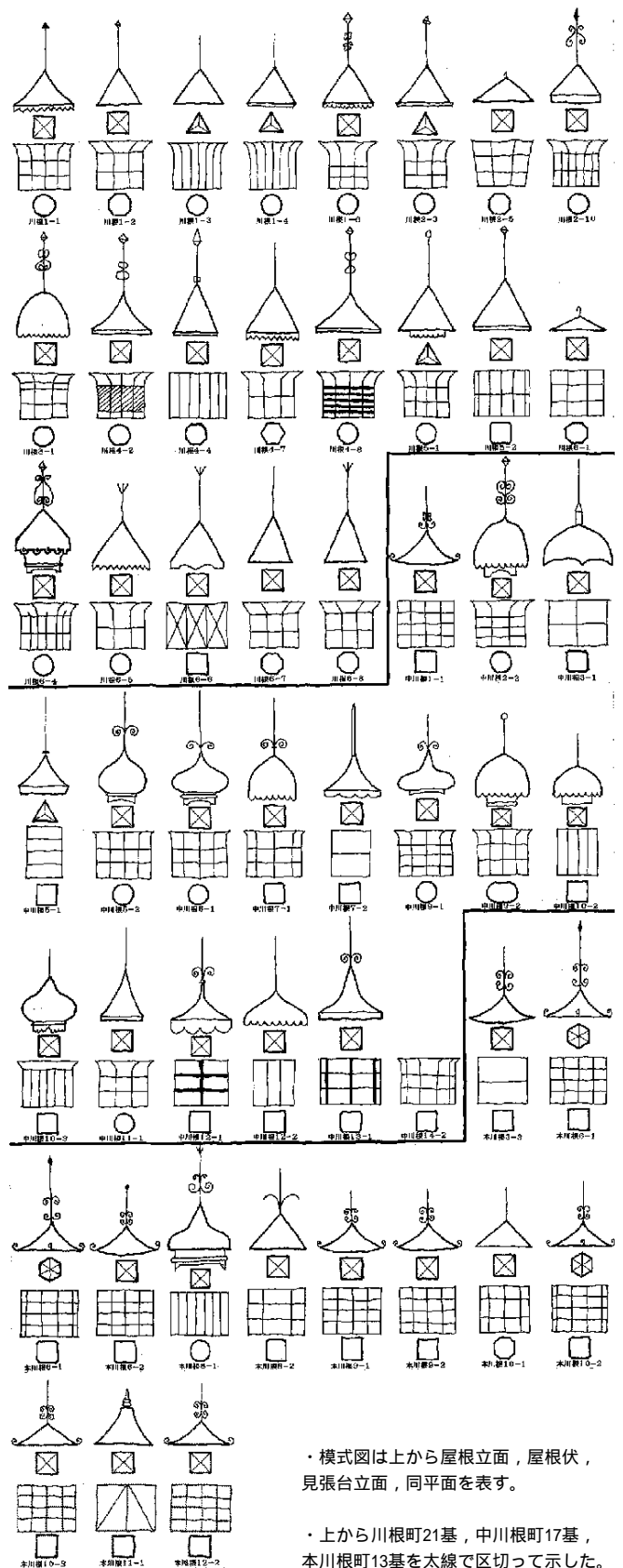
4.まとめと今後の展開

火の見櫓の建設年は明らかでないものが多いが、明らかな事例から昭和20年代後半から40年代初頭のものが多くと推察される。火の見櫓は機能的には全国均一の組織化と伝達方法による極めて近代的な施設といえるが、具体化する段階では地域ごとに職人の手仕事の構法によっており、このことがデザインの多様性を生み出したと考えられる。機能が同じであることがむしろヴァリエ - ションを生み、なかには近隣地域との差異を演出しようとする意図すら感じられる。火の見櫓においてはシステムの普遍性を技術の多様性が支えており、それが個性ある意匠を結果として造り出している。このことは現代の景観デザインの方法にも示唆を与えるものと思われる。

今後、静岡県下の全基についてのデザインヴァリエ - ションを把握するとともに、設計者・施工者が明らかな火の見櫓の建設プロセスや消失前後の地域住民の意識の相違などを考察していきたいと考えている。

「火の見櫓からまちづくりを考える会」の杉山瑠美, 和田厚, 小澤義一, 加藤ひろみ, 梶山理加, 伊達剛の各氏に感謝する。

註 1)後藤春彦『火の見櫓』の都市デザイン的意義に関する研究』日本建築学会東海支部研究報告pp549 552,199



・ 模式図は上から屋根立面, 屋根伏, 見張台立面, 同平面を表す。
 ・ 上から川根町21基, 中川根町17基, 本川根町13基を太線で区切って示した。

図2 デザインのヴァリエーション

* 静岡県島田土木事務所 修士(学術)

** 常葉学園短期大学 美術・デザイン科 講師・博士(学術)

* Shimada Construction office, Shizuoka pref.

** Lecturer, Dept. of Art and Design, Tokoha Gakuen Jr. College Ph.D